

C-31 造花の系譜(二) 万葉集に現われたカザシ・木綿花など
昭和女大短大 岡野都 ○醍醐るり子

目的 オ一報で古事記・日本書紀を中心に、古代における植物観と植物を身につけた最古の形態であるウズ・カヅラの二系列のうち、造花の原型と考えられた髻華(鈕)について述べた。髻華は「みくにぶり」で、美しい木や花を身につけたいというごく自然の動機や呪術的目的から用い、鈕は「からのさま」をとり入れた服制による冠位を表わした金属製の造花であった。これらが、どのように変化したのであろうか。

方法 今回は記・紀に続いて、万葉集の歌から造花に関連するウズ・カヅラ・カザシ・木綿花・薬玉の語を抽出し、万葉集成立の文化史的背景を考慮しながら、オ一報で述べたウズからの推移を検討した。

結果 (1) ウズは僅か3首しかなく、しかも呪術性のかげは薄れ、明らかにカザシへの推移をみる。(2) カザシは記・紀時代には出雲風土記に一例を見るだけであったが、集中ではほとんどが、カザス・カザシという動詞で詠まれ、名詞としても詠まれているが冠につけるカザシで主なり。花を賞で、単なる装飾や遊樂の小道具として楽しんだようである。なお、花の種類も梅、萩など10種におよび多彩である。(3) カヅラは記・紀に続いて多く詠まれているが、カザシ同様装飾的なものに移行している。(4) 木綿花は集中7首あり、いずれも木綿で造った花の美しさを歌っている。木綿は楮の皮をさらしたもので、純白の美しさがあり、これが造花にされたいが詳細については不明である。しかし前回の鈕と異なり「みくにぶり」の造花の源ではないかと考察する。